

H A G I

萩

題字は吉田松陰筆跡



AUTUMN ISSUE 2016

81



葛飾北斎「風流無くてなぐせ 遠眼鏡」(部分) 大判錦絵 享和期(1801~1804)頃

青花月兔文栗鼠耳角扁壺 朝鮮時代 18~19世紀

いずれも山口県立萩美術館・浦上記念館蔵

HAGI URAGAMI MUSEUM

# Oriental Ceramics and Ukiyo-e

## 2016/9/10 sat. > 10/16 sun.

休館日 ● 10月3日 [月]  
 開館時間 ● 9:00～17:00 (入場は 16:30まで)  
 観覧料 ● 一般1,000円 (800円)、70歳以上の方・学生800円 (600円)  
 ※ ( ) 内は前売りおよび 20名以上の団体料金。  
 ※ 18歳以下の方、および高等学校、中等教育学校、特別支援学校に在学する生徒は無料。  
 ※ 身体障害者手帳、戦傷病者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳の提示者と  
 その介護者 (1名) は無料。  
 ※ 普通展示 (陶芸館展示室) をご覧になる場合は別途観覧料が必要。  
 ※ 前売券は、ローンチケット (Lコード 62251)、セブンチケットおよび県内プレイガイドでお求めください。  
 [主催] 20周年記念展実行委員会 (山口県立萩美術館・浦上記念館、朝日新聞社、yab 山口朝日放送)  
 [後援] 山口県教育委員会、萩市、萩市文化協会、萩陶芸家協会  
 [特別協力] エフエム山口

やきもので  
 わくわく  
 浮世絵に  
 うまうま

東洋陶磁と浮世絵  
 一館蔵名品選

開館20周年記念特別企画展 I

## 当館の東洋陶磁コレクションと20年のあゆみ

当館が所蔵する東洋陶磁の礎となっている浦上コレクションは、新石器時代から明時代までの中国陶磁 230 点、高麗時代から朝鮮時代の朝鮮陶磁 86 点のあわせて 316 点で構成され、個人のコレクションとしては学術的にも価値の高いものを含んでおり、質・量ともに優れた内容です。

当館が開館した年の10月、「開館記念I 蒐集家 浦上敏朗の眼 一館蔵名品展 《中国・朝鮮陶磁篇》」が開催され、223 点の東洋陶磁を展覧しました。釉薬のかからない原始的な質感と雰囲気が魅力の古代の土器や、いくつかの色で彩られた唐時代の唐三彩、静かなたずまいのなかにも華やかさを忘れない宋時代や元時代の白磁や青花、古代からの時代の移り変わりを見ることができる青磁、青花の新たな魅力として展開した質朴で飄逸な明時代の古染付。また、朝鮮陶磁では中国の青磁をベースに独自に発展した高麗時代の高麗青磁や、朝鮮時代を特徴づけるやきもののひとつ粉青沙器や白磁などが一堂に展示され、陶磁器の魅力を紹介する初めての機会となりました。

時を経て、平成 15 年 (2003) には、山口県玖珂郡出身の松村實氏が蒐集された東洋陶磁を中心とした作品が山口県に寄贈されました。古代・唐・宋・元・明時代の中国陶磁、朝鮮

時代の官窯で製作された朝鮮陶磁、有田の染付や色絵をそろえる日本陶磁と、あわせて 46 点が新たに所蔵品に加わりました。新しい作品の紹介と、これを記念して、翌年の平成 16 年 (2004) に「受贈記念 松村實コレクション」展が開催され、陶磁器のほか日本絵画を含む 49 点の美術品が展示されました。

浦上コレクション、松村コレクションのようにまとまった作品群のほかにも、これまで所蔵品の内容を充実させる機会に恵まれ、開館以来大きく成長しました。特別展以外では、普通展示で 1 年に 3～4 回、いろいろな切り口で設定したテーマに沿って、作品とその魅力について紹介し、これにあわせて観覧者と作品について語り合う「ギャラリー・トーク」を実施して、その普及に努めています。

文化的な面から広く社会に寄与することを念願されて寄贈された作品と、その充実を図って収集した作品をまとめて展示し、これからも、さらに多くの方に芸術文化に親しみをもっていただけるようにわかりやすく紹介します。その新しいスタートとして、この 20 年のあゆみも盛り込んだ本展覧会をぜひご覧ください。

(市来真澄 / 当館学芸課主任)

青花月文文菓耳角扁壺  
 朝鮮時代 18～19世紀  
 高16.4cm



リスに、うさぎに…  
 カラスまで?! どんな  
 意味が込められて  
 いるのでしょうか?

仲もつまいおしどり  
 を華やかにみせる  
 五彩。



五彩鴛鴦文皿  
 明時代・万暦在銘  
 1573～1620年 口径14.8cm

北斎としては珍しい  
 浮世絵版画による美人  
 大首絵。世界で3枚  
 しか確認されていない、  
 当館自慢の一品です。



葛飾北斎  
 「風流無くてなぐせ 遠眼鏡」  
 大判錦絵  
 享和期 (1801～1804) 頃

図1

山口県立萩美術館・浦上記念館は、今年で開館20周年を迎えました。

当館は、萩市出身の浦上敏朗氏が東洋陶磁や浮世絵版画を中心とする美術品を山口県に寄贈したことを契機に、新しい芸術文化の発信拠点にふさわしい特色ある美術館として平成8年(1996)に開館しました。

浦上コレクションを出発点に内容の充実を目指してきた東洋陶磁と浮世絵は、時代や系統などの面において、より体系的に、よりわかりやすく美術品を展覧し、多くの方に楽しんでいただきたいと成長してきました。

ここでは、この20年間の成長ぶりをふりかえってみたいと思います。

## 当館の浮世絵版画コレクションと20年のあゆみ

5,300。現在のおおよその浮世絵版画所蔵点数を示すこの数は、浦上氏が30歳代の頃、島根県松江市で偶然に出会い購入した一枚の役者絵から始まりました。そして、浦上氏のコレクション寄贈を受け、当館の設立が決まった時、その数は1,930 点にまで成長していました。そこには、本展の目玉である葛飾北斎の「風流無くてなぐせ 遠眼鏡」(図1)をはじめ、喜多川歌麿の美人画、東洲斎写楽の役者絵など、浮世絵の黄金時代を飾る絵師の優れた作品が多く含まれていました。

その後、浦上氏の尽力により里帰りした旧チコチン・コレクション(図2)を山口県が購入し、貴重な初期の浮世絵が所蔵品に加わります。さらにデヴィット・キャプラン氏、安倍宗明氏、ロナルド・クライン氏の寄贈により、明治以降の作品が一群をなすようになりました。このようにして所蔵品の拡充がなされ、現在にいたっています。

また、これらをご紹介すべく、その時々で展覧会を開催してきました。これまで行ってきた館蔵の浮世絵版画による展覧会は、「開館記念I 蒐集家 浦上敏朗の眼 一館蔵名品展《浮世絵版画篇》」(1996年)、「開館一周年記念 チコチンの浮世絵 一新収蔵品展」(1997年)、「明治絵 一文明開化の世界展」(2005年)、「没後150年記念 広重の風景版画展」

(2008年)、「開館15周年記念 浮世絵名品300選」(2013年)など。2013年には、根津美術館において特別展「山口県立萩美術館・浦上記念館名品展 やきものが好き、浮世絵も好き」が開催され、所蔵品を本県以外でご紹介する機会にも恵まれました。

そして迎える20周年。今回は、130点のやきものと62点の浮世絵、ふたつのジャンルの美術品で構成する展覧会です。「浮世絵は出品数が少なくて満足できないのでは!？」という声が届いてきそようですが、いえいえ、そんなことはありません! 本展では、錦絵創始期に活躍した鈴木春信、浮世絵版画の黄金期を代表する鳥居清長や喜多川歌麿、東洲斎写楽、幕末に存在感を示した葛飾北斎や歌川広重、歌川国芳といった絵師たちの作品が並び、初期から後期まで、浮世絵の歴史が通覧できるようになっています。約5,300点のなかから厳選された優品と向き合い、鮮やかな色彩、繊細な描線、美しい摺りなど、浮世絵版画の魅力をご堪能いただければ幸いです。

参考: 浦上敏朗「或るコレクターの生活」1996年、平凡社  
 「山口県立萩美術館・浦上記念館名品選集 東洋陶磁と浮世絵」2013年

(淵田恵子 / 当館学芸課専門学芸員)

図2



葛飾北斎  
 「富士三十六景 凱風快晴」  
 横大判錦絵  
 天保2～5年(1831～1834)

旧チコチン・コレクション  
 からの出品作品の一つ。  
 「赤富士」と呼ばれ親し  
 まれ、シンプルな構図に  
 赤・青・緑のコントラスト  
 が見事な作品です。

こんな作品も展示されます!  
 歌川国芳「東都三ッ股の図」  
 横大判錦絵、天保(1830～1844)初期



江戸時代に東京スカイツリーが描かれている! と話題になった国芳の風景画。対岸に見えるスカイツリーらしきものは、井戸を掘るための構だと考えられています。

いかがでしたでしょうか?  
 本展覧会では、美術品やその魅力、さらにはそれらが作られ、使われた当時の社会や地域の特徴など、美術品が教えてくれるいろいろなことを紹介しています。これに少しプラスして、当館の成長ぶりを感じていただければ幸いです。

# すみすり

—堀尾卓司の赤間硯

石崎 泰之（当館学芸専門監）

硯が石で出来ていることを考えて下さい。石は永遠につながるものです。大昔から彫り刻み、用具として役立てて来ましたが、硯ほど石はだを親しまれ、愛されたものは類の少ないものかと思われます。宝石のような美しさはありませんが砥石のように実用一方でもありません。彫られた硯に越し方のくらしを、聞いてやって下さい。石が、硯が話しかけてくれます。古硯を尊重し現代の新しい感じを追求し、見ていると墨がすすつてみたくなる硯を作りたい念願にもえています。

これは、桜花満開のうらかな春の昼前、萩市内のと或る旧家で赤間石の古硯とともに拝見した、《赤間関硯 波濤研》(①)の作者略歴を記した葉の前口上です。作り手は、下関市南部町に「御硯司 赤間関硯本家 玉弘堂」を構える「硯匠 堀尾卓司」。その略歴の末尾が「皇太子殿下御成婚ニ際シ県市長会献上品謹作」とあるので、この硯が作られたのは今上天皇と皇后の結婚式(昭和34年<1959>4月10日)前後の時期と推測されます。

堀尾卓司(本名・薫、明治43年<1910>~昭和61年<1981>)は、下関で玉弘堂という硯商を営む坂次郎の次男として生まれました。玉弘堂は、祖父の吾作がやはり同地で硯を商う伊予吉中島玉寿堂の支店として興した店でしたが、坂次郎のときには廃業した本店の跡目も継いでいたようです。卓司の後年の記述(「赤間関硯」『郷土』第27・28集、下関郷土会、1981・1982年)によると、山口県立長府中学校二年在学中の大正末年に、応永年間(1394~1427年)に遡るともいわれる硯師の名門大森家系に連なる名工、狂泉堂大森頼蔵に感化されて作硯の道に進むことを決意し、昭和3年(1928)に同校を卒業すると自家で働いていた腕利き職人の崎川羊堂に師事して本格的な作硯生活に入ったとあります。

技術を着実なものとしていくなかで、かれはやがて自作の発表活動を始めていきました。前の葉の略歴には、商工省工芸展覧会第23回展入選(昭和11年<1936>)や、昭和8年(1933)の無型解散を受けて「用即美」の理念のもとに昭和10年に結成された実在美術工芸会の第3回展入選(昭和13年<1938>)、文部省美術展覧会(新文展)の第5回展入選(昭和17年<1942>)などが記されており、実用一辺倒の商品としての硯製造ばかりでなく、美術工芸作品としての硯制作という方向性に活路を求めていることがわかります。

卓司が作硯生活を始めた頃、硯はすでに筆記具としての一般需用品から脱落し、毛筆書写の授業用品として学校などの教育の場へと販路も狭まってきていましたから、伝統的な作硯活動を継続するためには正しい選択でした。折悪しく、総力戦遂行を掲げた戦時体制のもとに人と物資・物価に対する統制が強まるなか、下関では硯商の廃業が相次ぎ、硯工も少なくなってきていました。幸いにもかれは、「伝統的及新興工芸品の特殊技術」を保存する措置によって、昭和18年(1943)秋に技術保存資格者いわゆる「丸技」に



①《波濤研》昭和34年(1959)頃 個人蔵



②《豊麗》昭和34年(1959) 当館蔵



③《ビルディング》昭和45年(1970) 当館蔵

認定され、材料などの配給とある程度自由な価額での販売が認められました。しかし、戦後のさらに困窮を極めた社会情勢下、大森家系の玉池軒も店をたたんでしまい、下関で伝統的な赤間関硯(赤間硯)を扱う店はついにかれの玉弘堂だけとなってしまいました。

そんな状況でも、卓司は作品としての硯制作を続け、昭和23年(1948)の第4回日本美術展覧会(日展)以降7回も観賞性の強い具象表現の赤間硯を発表し続けました。萩の旧家で拝見した前掲の葉の口上書は、ちょうどその頃の心情を記したものでした。

石を「永遠につながるもの」とするこの主張は、硯作家として生き続けようとする卓司の確信に満ちた造形思考の表明だったと思われます。それは、「人間の手が触れたものはすべて、彼の暖かみ、その命の何がしかを受け取る。人間の仕事の結果たるものはみな、精神となる」と、アンリ・フォションが「石の言葉」(所収『かたちの生命』ちくま学芸文庫、2004年)という短い随筆の書き出しに謳い上げた、素材へ真摯に働きかける人間の力強い生命への称賛に通じる思念といえるでしょう。

ところで、この頃から20年ほどの間、卓司はそれまでの草花や波濤といった具象表現から離れて《豊麗》(②)など抽象の世界を硯に表現し、さらに《ビルディング》(③)や《双体》(④)といった「用」を脱した赤間石の構造的美感を追求した立体造形に踏み込んでいきます。そして、昭和54年(1979)頃からは再び「用」を意識した赤間硯の制作に戻りますが、それらは陸(墨堂)が縁よりも隆起した《すみすり》(⑤)のように、硯の機能を保持しながらも実用を超越した造形性を誇る新たな硯の創造でした。

伝統の技術を継承しつつ現代の生活感情に適う造形の創作をめざし、ついには自己の生命力を素材に照射して赤間硯に新たな表現性を追求した、赤間関の一硯匠の挑戦はいまなお光彩を放っています。



④《双体》昭和45~54年(1970年代) 当館蔵



⑤《すみすり》昭和54年(1979) 当館蔵

開館20周年記念特別企画展II

# すみすり

Modeling of Akama inkstone

## 赤間硯の造形

赤間関(下関市)でつくられたところから赤間関硯とも呼ばれる「赤間硯」は、その起源が鎌倉時代初期まで遡るとされる代表的な和硯です。江戸時代には、大森家が長府藩(萩藩の支藩)の御用硯師を務めるなど質的に高い水準の作硯技術を発達させ、中華文人趣味を反映した文様彫琢を巧みに施した観賞硯までつくられました。このたびは毛利家が贈答品などに使った赤間関硯の伝世品から、現代的な造形感覚のもとに下関市や宇部市で制作された「赤間硯」まで一堂に紹介します。

2016 10/18 tue. >>> 2017 1/15 sun.

休館日 ■ 10月31日[月]、11月7日[月]、  
11月21日[月]、12月12日[月]、  
12月26日[月]~1月1日[日・祝]

開館時間 ■ 9:00~17:00(入場は16:30まで)

観覧料 ■ 一般300(240)円、学生200(160)円

※普通展示観覧チケットでご観覧いただけます。

※( )は20名以上の団体料金。70歳以上の方、18歳以下の方と  
高等学校・中等教育学校・特別支援学校の生徒は無料。

※身体障害者手帳、戦傷病者手帳、療育手帳、精神障害者保健  
福祉手帳の提示者とその介護者(1名)は無料。

関連イベント ※要観覧券

①アーティスト・トーク

(作家による作品解説)

■堀尾 信夫 氏

(硯作家、山口県指定無形文化財「赤間硯」保持者)

日時…11月27日[日] 14:00~15:00

■日枝 陽一 氏(硯作家)

日時…1月8日[日] 14:00~15:00

②ギャラリー・ツアー

(担当学芸員による作品解説)

日時…11月13日[日]、12月11日[日]

11:00~12:00

主催 20周年記念展実行委員会  
(山口県立萩美術館・浦上記念館、  
朝日新聞社、yab山口朝日放送)

めいじ びじんが ようしゅう ちかのふ  
**明治の美人画 楊洲周延 I・II**

会期

- I** 平成28年 (2016) 10月18日 [火] ~ 11月20日 [日]
- II** 平成28年 (2016) 11月22日 [火] ~ 12月25日 [日]

明治期に活躍した浮世絵師、楊洲周延 (1838~1912) は、本名を橋本直義といい、越後高田藩に仕える武士でした。幕末の戊辰戦争の折には旧幕府軍側として、上野戦争や宮古湾海戦、函館戦争にも参戦しています。

明治8年 (1875) 頃より、豊原国周門下の浮世絵師として活躍し、さまざまなジャンルの浮世絵を手がけました。特に「御所絵」とよばれる天皇と皇后や御付の官女たちの群像や、江戸城大奥の風俗や江戸市民の間で流行した風俗の変遷など、江戸懐古趣味的な美人画も得意としました。

新時代の浮世絵をリードした周延の、華やかで上品な美人画を2回に分けてご紹介いたします。



「真美人 女教師」大判錦絵 明治31年 (1898)



「雨過洗庭之園」大判錦絵3枚続 明治21年 (1888)

# 青磁の流れ

【会期】

- 平成28年 (2016) 10月18日 [火]
- 平成29年 (2017) 1月29日 [日]

さまざまな青緑色を見せる青磁。これは、やきもの素地とその表面にかけられた釉薬に含まれるわずかな鉄分が、焼成時の高温にさらされるなかで発色して現れる色です。青というよりも緑に近い青緑色のものが多く、水色のような透明感のある青緑、深みのある濃い青緑など、いくつもの表情をもって、その色合いは人気を集める見所となっています。

では、このような青磁はいつから作られるようになったのでしょうか。発色の仕組みや成分、製作上の現象に注目すると、その初現は中国・商時代中期 (紀元前14~15世紀) にまでさかのぼり、後漢時代 (紀元後1世紀頃) までには浙江省北部において本格的な青磁が作られていたと考えられています。その後、唐時代の終わり頃 (9世紀) になると急速に諸外国に広まり、日本へも渡ってきました。また、近隣の朝鮮半島も例外ではなく、高麗時代 (918-1374年) を代表するやきもの「高麗青磁」に影響を与え、特徴ある青磁が作られました。

青磁の歴史とともに、色合いや形に注目してその魅力を紹介いたします。

やや灰色を帯びた青磁



青磁四耳壺 南北朝~隋時代 7世紀 高30.7cm

きれいな青緑色をした龍泉窯の青磁



青磁球形瓶 南宋時代 13世紀 高27.2cm

朝鮮半島で作られた高麗青磁



青磁象嵌菊花文四耳壺 高麗時代 12世紀 高32.7cm

2016	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31					
10	※普通展示(浮世絵)、(東洋陶磁)の展示室は、特別展示会場として使用します。																	普通展示(浮世絵) 楊洲周延I (10/18~11/20)																		
	普通展示(陶芸) 陶質のエロス 十二代三輪休雪の世界 (~2017/3/5)																	普通展示(東洋陶磁) 青磁の流れ (10/18~2017/1/29)																		
	普通展示(陶芸) 萩焼の細工物 (~10/16)																	普通展示(工芸) すみすり 開館20周年記念特別企画展II「赤間硯の造形」(10/18~2017/1/15)																		
	特選鑑賞室 歌川広重 名所江戸百景 よし原日本堤 (10/1~10/30)																																			
	茶室 清野耕一展 Cultivation / Between Heaven and Earth (培養体 / 天と地の間) (~2017/3/26)																																			
	特別展示 やきものでわくわく 浮世絵にうきうき 開館20周年記念特別企画展I「東洋陶磁と浮世絵一館蔵名品選」(9/10~10/16)																																			
	記念講演会	GT									GT													浮世絵												
11	普通展示(浮世絵) 楊洲周延I (~11/20)																	普通展示(浮世絵) 楊洲周延II (11/22~12/25)																		
	普通展示(東洋陶磁) 青磁の流れ (~2017/1/29)																	普通展示(陶芸) 陶質のエロス 十二代三輪休雪の世界 (~2017/3/5)																		
	普通展示(工芸) すみすり 開館20周年記念特別企画展II「赤間硯の造形」(~2017/1/15)																	特選鑑賞室 歌川広重 名所江戸百景 浅草田雨西の町詣 (11/1~11/30)																		
	茶室 清野耕一展 Cultivation / Between Heaven and Earth (培養体 / 天と地の間) (~2017/3/26)																																			
	11/1~11/6 普通展示観覧料無料 (教育・文化週間)																																			
											東洋陶磁	GT													浮世絵		AT									
	12	普通展示(浮世絵) 楊洲周延II (~2017/3/5)																	1/1まで休館																	
普通展示(東洋陶磁) 青磁の流れ (~2017/1/29)																	普通展示(陶芸) 陶質のエロス 十二代三輪休雪の世界 (~2017/3/5)																			
普通展示(工芸) すみすり 開館20周年記念特別企画展II「赤間硯の造形」(~2017/1/15)																	特選鑑賞室 歌川広重 名所江戸百景 深川洲崎十萬坪 (12/1~12/25)																			
茶室 清野耕一展 Cultivation / Between Heaven and Earth (培養体 / 天と地の間) (~2017/3/26)																																				
特別展示 現在形の陶芸 萩大賞展IV (12/3~2017/1/29)																																				
											GT		陶芸	GT											東洋陶磁											

休館日 ★ イベント ■ 記念講演会 ▲ アーティスト・トーク ● ギャラリー・ツアー ■ ギャラリー・トーク

★ イベント

「開館20周年記念関連イベント」

●美術館オリジナルグッズプレゼント  
内容 ● 展覧会をご覧頂く先着200名様(各日)  
実施日 ● 10月14日[金]、15日[土]、16日[日]

●月夜のナイトミュージアム  
実施日 ● 10月15日[土]

①特別展の開館延長~20:00まで

②ヴァイオリン・デュオコンサート

時間 ● 17:30~18:20

場所 ● エントランスロビー

出演 ● 村元まり子、上土居宏予

定員 ● 100名程度(当日先着順)

料金 ● 無料

③ナイトギャラリーツアー

時間 ● 18:30~19:30

場所 ● 本館1階・2階展示室

料金 ● 特別観覧券が必要です。

●石見神楽公演

日時 ● 10月16日[日]

13:30~14:30(雨天中止)

場所 ● 美術館入口

料金 ● 無料

※イベント詳細は美術館ホームページをご覧ください。

「Marché de Noël (マルシェ・ド・ノエル)」

内容 ● クリスマスマーケットをイメージした催し

日時 ● 12月10日[土]、12月11日[日]

9:00~16:00

場所 ● 山口県立萩美術館・浦上記念館

「呈茶席」

内容 ● 秋茶碗で楽しむお抹茶

日時 ● 12月17日[土]、12月18日[日]

11:00~15:00

場所 ● 山口県立萩美術館・浦上記念館

本館1階ロビー

■ 記念講演会 (聴講無料 / 当日受付先着順)

日時 ● 10月1日[土] 13:30~15:00

講師 ● 小林 忠氏

(岡田美術館館長、学習院大学名誉教授)

演題 ● 浮世絵の魅力

場所 ● 講堂(座席数84席)

▲ アーティスト・トーク

日時 ● 11月27日[日] 14:00~15:00

解説 ● 堀尾 信夫氏

(硯作家、山口県指定無形文化財「赤間硯」保持者)

● ギャラリー・ツアー (担当学芸員による特別展示作品解説)

いずれも11:00~12:00

やきものでわくわく 浮世絵にうきうき

開館20周年記念特別企画展I「東洋陶磁と浮世絵一館蔵名品選」

浮世絵 ● 10月9日[日]

やきもの ● 10月2日[日]、10月16日[日]

すみすり 開館20周年記念特別企画展II「赤間硯の造形」

11月13日[日]、12月11日[日]

現在形の陶芸 萩大賞展IV

12月4日[日]、12月18日[日]

■ ギャラリー・トーク (担当学芸員による普通展示作品解説)

いずれも11:00~(30分程度)

10月22日[土] 楊洲周延I

11月12日[土] 青磁の流れ

11月26日[土] 楊洲周延II

12月10日[土] 陶質のエロス 十二代三輪休雪の世界

12月24日[土] 青磁の流れ

※イベント詳細については美術館ホームページをご覧ください。

※アーティストトーク、ギャラリー・ツアー、ギャラリー・トークへのご参加には観覧券が必要です。

■ 交通アクセス

【新山口駅から】

● 直行バス(スーパーステップ)約60分で

萩・明倫センター下車。徒歩約5分。

● 防長バスまたは中国JRバス(約70~95分)で

萩バスセンター下車。徒歩約12分。

【JR山陰本線】

● JR萩駅から萩循環道ありバス(西回り)約30分。

● JR東萩駅から萩循環道ありバス(東回り)約30分。

● JR玉江駅から徒歩約20分。

【自動車】

● 「中国自動車道」美祿東JCT経由。

「小郡萩道路」給室ICから約20分。

● 「山陰自動車道」三見ICから約10分。

国道191号沿い。

【山口宇部空港から】萩・石見空港から

● 萩近鉄タクシー(乗合タクシー)約70~80分。

(利用前日までに要予約)

